

# 物語テストと質問紙による共感性測定の試み

東京大学教育心理学研究室 井 上 健 治  
西 澤 朋 子  
尾 辻 俊 昭

## Measuring Empathy with Story-Test and Questionnaire

Kenji INOUE, Tomoko NISHIZAWA, Toshiaki OTSUJI

This study presented the development and validation of two types of indices of empathy for the grade school children : Story Test and questionnaire measure.

Subjects were 250 fifth graders. An emotionally loadened story (about 4000 letters) was vocally presented to subjects and they were asked several questions.

In the Story Test, the number of the emotional scenes the child selected as impressive and the number of affect-matches like Picture-Story measures were conceptualized as empathy scores.

The questionnaire was factor analyzed and found two factors : empathic concern and tendency to emotional involvement.

Correlations testing the relationships of these indices of empathy to the scores of altruism and emotionality which were rated by peers, formed the construct validation.

The measures demonstrated preliminary construct validity.

### 目 次

#### I 問題及び研究の目的

#### II 方 法

##### A テストおよび調査の内容

##### 1 物語テスト

##### a 物語の選択および修正

##### b 質問の内容

##### c 予備調査

##### 2 共感性質問紙

##### 3 Guess who テスト

##### 4 ソシオメトリックテスト

##### B 被験者

##### C 実施時期

##### D 実施の方法

##### E 得点化の方法

##### 1 物語テスト

##### 2 共感性質問紙

##### 3 Guess who テスト

#### III 結果と考察

##### A 尺度の構成

##### 1 物語テスト

##### 2 共感性尺度

##### B 各測度の得点および性差

##### C 測度間の相関

##### 1 物語テストと Guess who テスト

##### 2 物語テストと共感性尺度

##### 3 共感性尺度と Guess who テスト

##### 4 ソシオメトリック地位との相関

#### IV 討論

##### I . 問題及び研究の目的

共感性に関する研究は、これまで数多くなされてきたが、共感性の定義や測定法には多くの問題が残されている。定義については、他者の情動に対応する情動の共有という点ではかなり共通性が見いだせるが、実際に測定するときになされる操作的定義はさまざまであり、それに応じて測定法も多様で、研究間の一貫性が乏しい。また、sympathy, personal distress, role taking といった共感性に近い概念が多くあることも問題を複雑にしている。これらの概念はそれぞれ重複した部分もあるが、全く同じではない。そこで、実際に共感性を測定する時には、それらの概念のいずれかに近いものを測定することになり、共感性と称するものの内容が研究によって少し

づつ異なることになる (Eisenberg & Strayer 1987)。もっとも、Hoffman(1982)のように、子どもの共感的な情動喚起は、新生児にみられる泣きの伝染のように、早くからその芽生えがあり、子どもの経験の増加、認知の発達によって表われ方が変化し広がる、つまり共感のレベルが異なってくるのだ、という考え方もある。そうだとすると、共感性は横に広がりを持つだけでなく、縦の(発達の)内容の違いも考慮しなければならなくなる。しかし、ここでは発達的な問題にまで立ち入る余裕はないので、児童期における共感性を想定して議論を進める。

従来、共感性の測定に用いられてきた指標として、質問紙、Picture-Story、表情や動作などの観察、生理的指標(心拍数、血圧等)などが主に用いられてきたが、本研究では、このうち前の二つの指標に焦点を当てることとする。

Picture-Story 指標では、情動喚起的な文脈の中で主人公が描かれた一連の話を絵とともに提示し、主人公の情動(一般に、実験者によって定められた、その場面での主人公にふさわしいと考えられる情動)と被験者が報告した被験者自身の情動との一致を操作的に共感性と定義している。その代表的なものに、Feshback Affective Situation Test for Empathy (FASTE: Feshback & Roe, 1968)があり、これは、主人公にふさわしいとされる情動と被験者自身の情動との一致を共感性としている。Picture-Story 指標は、共有された感情という共感の第一義の定義に合うものである。また、比較的低年齢の子どもにも用いることができ、実施にあまり時間がかからない等の利点がある。

しかし、一方では、次のような弱点が指摘されている。すなわち、情動の一致のみを共感性として定義してしまうのでは、限定的すぎるのではないか。用いられた場面によっては「正しい」情動を同定できないこともありうる。子どもの反応は、共感的反応というよりは、要求特性や社会的望ましさの反応ではないか (Eisenberg & Lennon, 1983, Strayer, 1987)。さらに、場面設定が単純すぎて、真の共感の喚起は無理ではないか。共感と呼び起こすことがないとすればなおのこと、子どもはその場の要求しているもの(要求特性)を推測して答えるしかないであろう。その上、いくつも似かよった話を聞かされるために共感の喚起が起こりにくくなることも考えられる。

Feshback (1978) は、共感性を構成する要素として三つをあげ、その第一の要素として、他者の情動状態を識別し同定する能力をあげている。しかし、他者の情動状態を同定したり、FASTEの要求するように自己の情動

経験を表明し、ラベリングするには、ある程度の言語能力が必要である。これはある発達レベルに到達した子どもにとってはさほど困難ではないが、Picture-Storyの対象が多く低年齢層(小学校2~3年ぐらいまで)であることを考慮すると、この問題は看過できない。逆に(課題の複雑さにもよるが)ある発達レベル以上の子どもにとっては、この作業、特に情動の同定は容易すぎて、共感性測定の方法としてはあまり意味をもたないかもしれない。

質問紙法では、Mehrabian & Epstein (1982)の測度が多く使われている。これらは、他者の情動経験に対する認知的洞察の正確さではなく、他者の情動経験に対する情動的な反応のしやすさ(情動反応性)の自己知覚を共感性としてとらえており、その人のより一貫した反応傾向の自己報告である。

質問紙による指標の問題点としては、社会的望ましさなどの質問紙法一般の弱点の他に、さまざまな研究で測定されている共感性の内容が一次元的ではないということがあげられる。

例えば、Davis (1983a) は、共感性をむしろ多次元的なものととらえ、以下の四つの下位尺度からなるIRI (Interpersonal Reactivity Index)を提案した。

#### ① role taking

他者の心理的な視点を自発的に取ろうとする傾向。これは態度をさすのであって能力をさすのではないが、四つの下位尺度の中では最も非情動的な側面である。

#### ② empathic concern (sympathic concern)

他者に対する思いやりの感情を経験する傾向。明らかに情動的な反応の測度である。この場合、焦点は自分より他者で、他者と自分自身の情動との一致を必要としない。

#### ③ personal distress

他者の distress に関わる手がかりを知覚したとき、その他者の状況に適合する不安や心配のようなネガティブな感情を経験する状態。empathic concern と異なって、自己志向ないし自己中心的な反応であり、自分自身のいやな状態を和らげようとする動機を導く。

#### ④ fantasy (imaginal involvement)

自分が小説や映画、演劇などの登場人物になったように想像する傾向。

しかし、これらの尺度は重複部分も多く相互に独立というわけではない。

そこで本研究では、以下を目的とする。

#### 1) 物語テストの作成と検討

主人公が情動体験をする簡単な絵及び物語を提示し、

それに対する反応を見るという Picture-Story の手法を生かしながら、その弱点を改善しようと考えた。あわせて、われわれは、今回の研究の対象として小学校の高学年レベルを想定しているので、その年齢も考慮しながら、以下のようなテスト（物語テスト）の作成を試みた。さきに述べたように、Picture-Story では場面設定が単純すぎるので、とくに児童期中期以降の子どもには不相当であると考えられる。そこで、場面設定の材料として、その中にいくつかの情動喚起場面を含むような物語（文学作品）をもちいる。この物語では、Picture-Story では描きえない背景を提示することによって、話の現実性が増し、また被験者の興味を惹くようになっているため、被験者が物語りに引き込まれ、情動が喚起されやすくなると考えられる。

質問の内容は、大きく分けて二つになる。一つは Picture-Story の内容と並行になると考えられるもので、主人公の情動を問うものと、それに対する被験者自身の情動反応を問うものを含む。もう一つは、情動喚起の場面に対する感受性を調べることを通して、共感性に迫ろうとしたものである。これは Picture-Story の諸方法には見られない手法であり、いわば投影的なねらいをもっている。従って社会的望ましさや要求特性は影響しないと考えられる。共感性測定の一つの新しい方法となり得るかもしれない。

## 2) 質問紙による共感性の測定

従来の質問紙による方法の内容が多次元的であるという批判に対応して、ここでは他者の情動経験に対する情動的反応の自己知覚という原則に合う限り、あえて、共感性について一つの厳密な定義を採用しない。むしろ共感性に関係が深いと思われるさまざまな概念を考慮に入れて包括的な質問紙を構成する。ただし、その際、共感性の認知的な側面よりも情動的側面を重視する。具体的には前記の Davis (1983a) の 2, 3, 4 および情動的感染 (emotional contagion: 他者の情動に一致する情動の経験という、多くの共感性定義に共通している部分)、さらに、以上のいずれに含まれるとも決め難い、より一般的な情動反応性 (emotionality: 他者の情動経験に対する情動的な反応のしやすさ) などを手がかりとして、項目を作成・選択する。Davis (1983a) の role taking は、認知的な態度を見ようとするものであり、認知的色合いが強いこと、および、質問が社会的望ましさを反映しやすいものになりがちなことにより除外した。そして、これらの包括的な項目群を検討することによって、共感性あるいは共感性関連概念の構造をみていこうと考える。

## 3) Guess-Who テストとソシオメトリー

1) および 2) の両測度の妥当性を検証することを試みる。直接的に共感性を表している外的基準はないので、理論的に共感性の構成概念に関係が深いと考えられる測度との関連を見ることにする。ここで考えたのは次の三つである。

### a. 向社会性

共感性は向社会的反応に他ならないという解釈もあるが、一般には、共感性は向社会性を媒介するものであると考えられている。もちろん、共感性が高くとともにそれがただちに向社会性に結びつくとは限らない。例えば、行動のコストが高く行動が抑制される場合、あるいは向社会的行動を必要としない楽しい場面など、状況特有の要因が影響するからである。しかし、ある程度の長さの時間の幅をとるならば、共感性がなんらかの形で向社会的行動として現れる可能性が大きくなるであろう。共感性が向社会性を媒介するという考えからいえば、少なくとも、向社会性の高い者は共感性がある程度高いという関連が予想される。そこで、Guess-Who テストによる日常的な向社会的行動傾向と共感性得点との関連を見ることにする。

### b. 情動共有傾向

先に述べたように、質問紙の内容にはさまざまな次元を含めるが、それらの次元は、情動反応性という点では共通している。また、物語テストの一つは、情動喚起場面に対する感受性を測定しようとするものである。このような点から、情動共有傾向の基準による Guess-Who テスト得点との関連を見ることにした。

上述のように、向社会性・情動共有傾向の二つの測度はいずれも Guess-Who テストを使用することにした。Guess-Who テストは、表面に現れた行動の仲間による評定であり、例えば教師による評定よりも、日常的な、しかも、ある場面特有というよりは個人に一貫した行動傾向をよりよく反映すると考えられる。また、設定者の数が多いので客観性も増す。さらに、選択基準の設け方によって、向社会的行動とか情動共有傾向とかいったさまざまな次元の基準に近づくことができ、識別的安全性を検証し得る期待もある。

### c. Popularity (人気度)

共感性の発達した子どもは、他者の感情に焦点を当てる傾向があるといわれる。とすれば、そのような子どもは、他者と、よりスムーズな人間関係を築き、維持することがしやすい存在かもしれない。そこで、そのような指標としてソシオメトリックテストを実施し、ソシオメトリックな地位との関連も見てみることにする。

なお、物語テストの結果と質問紙の結果の関連も見。

両者はともに自己報告であるが、質問形式は全く異なり、内容もほとんど無関係であるので、共通の応答態度の影響のようなものは比較的少ないと考えられる。そこで、もし両測度に関連があれば、それは両測度の妥当性を相互に補強するものと考えられる。

## II. 方 法

### A. テストおよび調査の内容

#### 1. 物語テスト

##### a. 物語の選択および修正

使用する物語としては、芥川竜之介の作品「白」（岩波文庫所収）を選択した。この物語の主人公は白という犬で、恐れ、驚き、悲しみ、怒り、さびしさ、喜びといった情動を次々に経験して行く場面が含まれている。ただし原作は、朗読するための時間、被験者の注意の持続力、記憶力などを考慮するとやや長すぎるため、その骨子を変えないよう配慮しながら一部を削除、修正した。その結果、物語の長さは約4000字、朗読時間は約13分となった。物語の概略は以下の通りである。

ある日、白は散歩の途中、犬殺しに会う。犬殺しは白の友達の黒くんを狙っている。黒くんを助けたいが、自分も危ない。白は一瞬ためらう。しかし、ついに黒くんを見捨て、逃げ出してしまふ。白は、やっとの思いで我が家に帰りついた。しかし、美しかった白の体はいつのまにか真っ黒に変わっていた。飼い主にも自分とわかってもらえず、白は家を追い出された。街をさまよう白。そこへ子犬の悲鳴が届く。「あの一瞬」が白の脳裏をよぎる。意を決した白は子犬の危機を救った。しかし帰る場所のない白にはため息だけが残る。真夜中、白は再び我が家へたどりついた。白の目には涙。月に祈る白。翌朝、飼い主が白を抱きしめた。白はもとの姿に戻っていた。

##### b. 質問の内容

#### (1) 印象に残った記述の選択

物語を4つの局面にわけ、各局面毎に、本文から、主人公が特に強い情動を経験し、それに対する被験者の情動をも喚起する可能性の高い記述を2カ所、主人公の情動とあまり関係のない記述を3カ所ずつ抜き出し、5肢の選択肢からなる質問を4項目作成した。被験者は5肢の中から「頭に最もよく残っている」記述を2肢選択する。これは、情動喚起的な場面に対する感受性を調べよ

うとするもので、共感性の高い児童は主人公が強い情動を経験した場面の記述を選択することが予想される。

#### (2) 他者（物語の主人公）の感情の推測

物語の主人公が強い情動を経験する場面を提示し、その場面で主人公が「どういう気持ちになったか」を推測して自由記述することを求めた。用いた場面は5カ所。

#### (3) 被験者自身の感情

ある場面での主人公の情動的な経験に対する被験者自身の反応を求めるため、各場面毎に5肢の選択肢を作成した。その中に、共感性の高い児童が反応すると予想されるものが1肢含まれる。(2)と同様に場面を提示し、その場面で被験者自身が「どんな気持ちがしたか」を問い、近いものを1肢選択させた。用いた場面は(2)でを使用した以外の5カ所。

なお、(2)および(3)は従来 Picture-Story で測定されていたものにあたと考えられる。

#### (4) 理解および記憶テスト

共感性の高い児童でも物語の理解および記憶が不十分なため共感性の得点が低くなる恐れがある。その影響の有無を確かめて統制するため、物語の各部分に関する記述13項目について、その正誤を判定させた。

### C. 予備調査

教育心理学専攻の大学生10人に予備調査を実施した。その結果、以下のことが確認された。

(1)で、主人公が特に強い情動を経験し情動喚起的な場面とされた選択肢が適切と思われること。

(2)で、実験者が各場面での主人公の気持ちとして想定した感情が適切と思われること。

(3)で、「共感性の高い子どもならどのような気持ちになるか」を推測させた結果、実験者が共感性の高い子どもの反応と想定した選択肢が適切と思われること。

なお、同じ大学生10人の意見によって、物語の本文は理解しにくいなどの問題点はなく、かつ小学生に対しても十分に情動喚起的である、とみなされた。

### 2. 共感性質問紙

Mehrabian & Epstein (1972) の Questionnaire Measure of Empathic Tendency, Bryant (1982) の Index of Empathy for Children and Adolescents などをもとに共感性の下位次元をまとめ、さらに新たに考えた項目を加えて、計32項目からなる共感性質問紙を作成した。既に述べたように、様々な次元の項目をとり入れたが、どの次元に属するかはつきり決められない項目もあった。考慮した下位次元は以下の通りである。

#### (1) personal distress

- (2) empathic concern (sympathic concern)
- (3) imaginal involvement (fantasy)
- (4) emotional contagion
- (5) emotionality

項目の作成に際しては、被験者が児童であることを考慮して、具体的な場面での「気持ち」を問うことにした。全項目の言葉遣いや内容の適切性については、教育心理学専攻の大学生3名に検討を受け妥当とされた。回答は「よくあてはまる」、「わりにあてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の5件法とした。

### 3. Guess Who テスト

被験者の日常生活における共感的行動・態度（向社会性および情動共有傾向）の傾向を調査するために、Guess who テストを実施した。項目の内容は以下の通りである。

- (1) 「友だちが落ち込んでいるときに、その人のことを親身になって（その人の身になって）心配してあげたりするような人（しそうな人）」
  - (2) 「下級生のめんどうをよく見てあげたりするような人（しそうな人）」
  - (3) 「人のうれしい気持ちや悲しい気持ちに心を動かされて、自分もそういう気持ちになりやすそうな人」
- (1), (2)は向社会的な傾向, (3)は情動共有傾向の評価であると考えられる。なお、ここで(3)の質問は他者の内部の感情の動きを推測することが必要になるため特に難解と思われ、また人の意見に振り回されやすいというような被影響性の質問と誤解される恐れもある。そこで調査の際に教示者が「例えば、友だちがうれしそうにしていると自分も同じようにうれしくなり、悲しそうにしていると自分も同じように悲しくなってしまうような人」を思いうかべるよう教示した。

### 4. ソシオメトリックテスト

選択基準は「休み時間などに、いっしょに遊んだり、話をしたりしたい人」。5位まで選択させた。

## B. 被験者

都内公立の2つの小学校5年生計259名（男124名、女135名）。

ただし、欠測値などのため部分的に使用不可能な資料があり、分析に用いられる数はその都度多少減少する。

## C. 実施時期

1991年2月26日（火）、および3月6日（水）、授業時間に実施した。

## D. 実施の方法

物語テストでは、あらかじめ実験者の一人が物語を朗読した録音テープを用意した。なお朗読は児童が十分に聞き取れるようゆっくり行った。テープを聞かせる前に、「このお話しは、白という名前の犬（物語の主人公）が出会ったできごとのお話しです」と教示し、被験者が主人公の立場にたちやすいようにした。また、文脈理解を容易にするために、物語の登場人物を板書して主人公との関係を説明した。テープを聞き終わった後で、教示者が質問及び選択肢を順次読み上げ、十分に時間をとりながら回答を求めた。

共感性質問紙も同様に教示者が質問を読み上げながら回答を求めた。

Guess Who テストでは、記入用紙とともにクラスの名簿（各人に番号を付してある）を配布し、クラス成員をもれなく評価できるよう配慮し、記入も番号で行わせた。各項目について5～6名記入するよう求めたが、該当する人がそれだけ思いつかないときには無理に選ぶ必要はないこと、多数思いついたときには多く記入してもよいことを教示した。さらに、いったん記入した人の中で、「とくにそうだと思う人」の番号を○で囲ませた。また、異なる項目に同じ人をあげても構わないが、次の項目に進んでからは前の項目に戻らないよう教示した。

## E. 得点化の方法

### 1. 物語テスト

(1), (3)については、共感性の高い児童が反応すると想定される回答にそれぞれ1点を与えた。(2)の自由記述は主人公の感情としてふさわしいものであるかどうかを評定し、0～2点で得点化した。

### 2. 共感性質問紙

「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」まで、それぞれ5～1点として得点化した。なお、32項目中6項目は方向を逆転して得点化した。

### 3. Guess Who テスト

各項目について、被選択数を個人の得点とした。「特にそうだと思う人」の番号を○で囲むこともさせたが、生徒によって○をつける数の変動が大きく、特定個人の影響を受けやすくなるので、これは考慮しないことにした。

## III. 結果と考察

### A. 尺度の構成

#### 1. 物語テスト

質問(1)と(2), (3)はもともと測っているものの内容が異

なっているので、別個に扱うことにした。

質問(1)は項目数が少ない上に、以下のような理由が加わって信頼性 ( $\alpha$  係数) が低い。この質問は物語の 4 つの局面でそれぞれ 5 肢選択の質問を作り、そのうち 2 つの選択肢が情動喚起的な場面である。そしてこれらの選択肢を選択すれば「正答」とするのであったが、選択すべき選択肢の数が 2 つと限られているために、この 2 肢は相互に独立でなくむしろ排反的になる。つまり一方を選べば他方を選ぶ確率は減少する関係にあり、従って  $\alpha$  係数は必然的に低くなる。これは問題作成上のミスであった。しかし、信頼性の低さを認めた上で、ここではこれを一つの尺度として扱い、情動反応性 (ST1) と称することにす。

質問(2)と(3)は、それぞれ共感の前提としての他者の情動の推測および他者の情動状態に対応する情動の経験である。これも内容的に異なるといえばいえるのであるが、因子分析の結果、不十分ながら一応一因子性が認められたので、一つの尺度として扱い、自他感情推測 (ST2) とする。項目数が少ないため、 $\alpha$  係数は .56 とこれも低い。

## 2. 共感性尺度

32項目を因子分析 (Varimax 回転) したところ 2 因子が得られた。

第一因子は「友だちがニコニコ笑っているのを見ると自分までなんとなく楽しい気持ちになる」、「ひとりぼっちのお年寄りを見るととてもかわいそうになる」といった 13 項目で負荷量が高く、前者の例のような情動の共有

表 1 各尺度  $\alpha$  係数, 平均及び標準偏差

	$\alpha$	計 <sub>n=242</sub>		男子 <sub>n=116</sub>		女子 <sub>n=126</sub>		性差
ST1 (情動反応性)	.31	5.40	1.57	5.21	1.69	5.58	1.43	x
ST2 (自他感情推測)	.56	9.60	2.44	8.98	2.48	10.19	2.26	**
STT (計)	.55	15.00	3.16	14.19	3.29	15.76	2.84	**
STC (理解・記憶)		10.47	1.74	10.17	1.78	10.71	1.64	*
EMP1 (共感的関心)	.84	45.07	8.49	41.81	8.71	49.09	7.08	**
EMP2 (情動的関与)	.75	29.51	5.77	27.09	5.93	31.74	4.60	**
EMPT	.87	87.21	14.47	80.69	14.66	93.21	11.42	**
GW1 (友人を心配)		4.83	4.29	4.02	4.16	5.58	4.29	**
GW2 (下級生のめんどう)		4.60	4.35	3.97	3.90	5.19	4.66	**
GW3 (人の気持ち)		3.55	3.23	2.94	3.43	4.10	2.93	**
SOC (ソシオメトリック地位)		14.24	8.68	14.36	10.07	14.13	7.20	

x :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$  (以下の表も同じ)

ないしは情動的感染と、後者の例のような同情的関心の両方を含んでいる。両方のニュアンスを含めるために、以下、共感的関心 (EMP1) と称する。

第二因子の負荷量の高い 8 項目は内容がやや複雑である。「映画やドラマを見て思わず夢中になってしまうことがある」のような Davis のいう fantasy (imaginal involvement) と思われるものもあれば、「友だちに悩みをうちあけられるのはいやだ」のような personal distress に近いものもある。共通しているのは、他者やフィクションの登場人物の感情にひきこまれやすいかどうかという点であろう。非関与性とよぶのが適当な尺度だと思われる。しかし、共感性得点として示すためには逆方向を得点とすることが必要であるから、非・非関与性とすべき

であるが、わずらわしいので、情動的関与 (EMP2) と名付けておく。

以下では、共感的関心と情動的関与をともに扱う。両下位尺度の得点は、それぞれに負荷量の高い 13, 8 項目の単純合計をもってこれにあてた。両尺度間の相関は .55 である。

なお、上記第一、第二因子に負荷量の高い 21 項目と、他に 4 項目を加えた 25 項目は、主因子解の第一因子が高かったので、これも EMPT として分析に加えることとした。したがって、EMPT は EMP1+EMP2 ではない。EMP1, EMP2, EMPT の  $\alpha$  係数はそれぞれ .84, .75, .87 であり、この種の質問紙としては十分に高い結果といえる (表 1)。

上述のように、質問紙作成にあたって可能性を想定したほどには分化した下位尺度を見いだすことはなかった。しかし、あえていえば、質問紙作成にあたって考慮した次元のうち、sympathic concern と emotioanl contagion が第一因子に、imaginal involvement と personal distress (逆方向) とが第二因子に別れたといえる。emotioanlity はもともと中間的な性格をもつものなので、上記のいずれかにちらばったものと思われる。なお、下位尺度については被験者の年齢 (小学5年生の反応傾向がそれほど分化していないのかもしれない)、質問項目の数のバランスの問題もあり、今後さらに検討を進めなければならないと思われる (論文末尾に質問項目をかかげた)。

**B. 各測度の得点及び性差**

各測度の男女別および男女を合わせた得点の平均および標準偏差は表1の通りである。

FASTE では女子が高いという報告と性差がないという報告が混在している。この物語テストではST2で有意に女子が高く、ST1も有意ではなかったが、やはり女子が高い傾向を示した。被験者がFASTEの対象年齢より高い小学校5年生ということを考えれば、性差のあることは十分に納得できるものである。

質問紙の各尺度はいずれも女子が高かった。その差の大きさは男子の得点の1標準偏差分あるいはそれ以上に及ぶほど顕著なものであった。過去の研究でも質問紙の共感性尺度では、ほとんどが女子の高得点を報告しており、メタ分析においてもそれが確認されていることと一致している (Lennon & Eisenberg 1987)。質問紙の共感性尺度の性差が顕著なことに関しては、自己報告における性役割期待のバイアスと実際の社会化効果のいずれか、あるいは両方の要因がからむとされているが (Lennon & Eisenberg 1987)、すぐ後に Guess Who テストの項で述べるように、質問紙と内容は多少異なるものの、共感性に関与していると思われる行動傾向の他者評定にも明白な性差があらわれているので、性役割期待のバイアスだけで説明することはできない。真の性差が存在することを示していると考えべきだろう。なお、真の性差が生じる原因としては、上記の社会化の効果のほかに生得的・生物学的要因も考えられるが、われわれはこれについて論議する根拠をもっていない。

**C. 測度間の相関**

各測度の得点間の相関を表2に示す。性別の相関も求めてみたが、全体の相関の値と大差なく、また性による

差もとくに認められなかったので、男女合わせたものの結果のみを示す。なお、物語テストについてはST1, ST2の得点の中に、物語内容の理解や記憶 (STC) の力が関与している可能性も考えられるので、ST1, ST2からSTCの得点をpartial outしたものと他の各測度の部分相関も算出した。もっとも、STCがST1やST2に影響するというよりは、物語の情動喚起部分により強い印象を受けたり (ST1)、登場人物の情動をよく理解したり、自分もそれに対応する情動を経験する (ST2) 子どもが、そのために物語をよりよく理解でき、記憶にも残るという因果の方向性も考えられないわけではない。そうだとすれば、部分相関よりも単純な相関の方が適切ということになる。

表2 各測度間相関および部分相関

	ST1	ST2	STT	EMP1	EMP2	EMPT	ST1	ST2	STT
	単純相関						部分相関		
EMP1	29**	17*	28**	55**	91**		27**	13**	25**
EMP2	36**	32**	42**		82**		31**	21**	33**
EMPT	35**	25**	38**				32**	18**	31**
GW1	18**	16*	22**	24**	21**	24**	17*	13*	19*
GW2	11	15*	17*	23**	19**	23**	10	10	13*
GW3	11	15*	17*	20**	28**	24**	12	14*	17*
SOC	12	-01	05	13*	06	10	11	04	09

表3 物語テスト得点上位・下位別 GW 得点平均 (標準偏差)

	n	GW1	GW2	GW3	
ST1	上	65	6.12(4.72)	5.41(4.41)	4.12(3.02)
	下	63	3.81(2.85)	4.02(3.66)	2.89(2.38)
	差		**	*	**
ST2	上	58	5.50(4.16)	5.09(3.84)	4.24(3.71)
	下	50	3.32(3.00)	3.22(3.40)	2.62(1.89)
	差		**	*	**

1. 物語テスト (ST) と Guess Who テスト (GW)  
 FASTE を代表とする Pictyre-Story 得点と向社会的行動との相関を調べた研究は数多くあるが、向社会的行動の指標如何に関わらず、相関は認められないか、あっても高くないものが多い (Eisenberg & Miller 1987a)。われわれは物語テストについて、友人評定による向社

会性（沈んでいる友人を心配，下級生の世話）および情動共有傾向（人の気持ちに動かされる）との関連をみようとしたわけであるが，有意な相関もあるものの，全体にその値は低く，従来の研究の域をこえることはできなかった。不十分な信頼性のほか，ST1，ST2とも得点の分散が小さいことも影響していると思われる。そこでST1とST2それぞれの得点の上位，下位およそ4分の1ずつをとって，それぞれのGW得点を比較するといずれも有意の差があり，ST1およびST2の高得点者は低得点者に比べて，向社会性および情動共有傾向について友人から高い評定を受ける傾向が見られた（表3）。しかし，有意ではあっても，ST1およびST2のGW得点を予測する力は強いとは言えない。

なお，GW得点は各学級単位のものであり，学級の人数，雰囲気などに違いがあれば，学級を越えての比較がしにくいことも考えられる。そこで，学級単位でGW得点を標準化したものとST得点との相関も求めてみたが，結果的にはほとんどちがいが見られなかった。

さて，上記の相関について，テストの内容からは以下の二つの問題点を指摘することができる。一つは物語テストの測定をしようとした内容が情動反応性および自他の感情推測であり，それらは共感性に近い反応ではあるが，それが他者に向けられた反応とは限らないために，向社会性や情動共有傾向との関連性が低くなったのかもしれないという点である。第二に，物語の主人公が人間でなく犬であったことが影響している可能性が考えられる。物語を選ぶときに，物語の長さが適当なこと，出現する情動喚起場面の数や種類の豊富さなどの理由で「白」を選択せざるを得なかったが，これはかなり大きな弱点になったかもしれない。人間に対する共感と犬に対するそれとは心的過程に違いがあり得るからである。

## 2. 物語テスト (ST) と共感性尺度 (EMP)

表2に見るように，どの下位テスト間の組み合わせにおいても有意である。しかし相関係数の絶対値はそれほど大きくない。物語テストと質問紙の各下位尺度相互間の相関を比較してみると，物語テストに対してはEMP2がEMP1よりも相関が高かった（ST2およびST1の単純相関で $P < .05$ ）。物語テストの内容は情動反応性および自他の感情の推測であるから，これらが共感的関心（EMP1）よりも情動的関与（EMP2）の方に多少とも関連が深いのは概念的には理解できる。なぜなら，共感的関心が他者に向けられた情動であるのに対して，ST1およびST2はその関心の方向が必ずしも明白でないからである。

一方，質問紙による共感性得点に対してはST1がST2

よりも相関が高い傾向があった（EMP1およびEMP2との部分相関で $p < .10$ ）。これはST2の感情推測課題には，認知的な面がより多く含まれるのに対して，ST1の情動反応性の方が感情経験そのものをより強く反映しているためと解釈される。

今回試みたST1テストはいろいろな克服すべき弱点がある（選択肢の排反性，質問数の少なさ，それらに関連する信頼性の低さ，物語の主人公が犬であったこと，など）が，この結果は，より間接的投影的なST1の形式の有効性に望みを持たせるものである。

## 3. 共感性尺度 (EMP) と GW テスト

共感性得点とGW得点の相関はどの組み合わせについても有意であったが，その値は高くはなかった。質問紙による共感性得点（代表的なものはMehrabianらのもの）と向社会性との関連を見た先行研究は多くあるが，Picture-Storyと向社会性との関連に比べれば相関のある結果が多くなっている。概念的にもPicture-Storyで測られるものより質問紙の内容の方が共感的関心に近いからと思われる。しかし，その大部分は大人を対象としたものであって，しかも，中には向社会性の測度として被験者の自己報告を用い，質問内容もよく似ていてほとんど同義反復としか思えないようなものもある（Davis 1983a）。一方子どもについての資料は少なく，結果は大人の場合よりいくぶん一貫性が低い。

GW1およびGW2を向社会性の測度とした本研究も十分に満足できるものとはいえない。しかし，情動的関与を内容とするEMP2よりも共感的関心を内容とするEMP1の方が，向社会的傾向をみるGW1およびGW2との相関が高く，一方，情動共有傾向をみるGW3ではEMP1よりもEMP2との相関が高い傾向がある（有意ではなかった）のは，識別的妥当性とまではいわないまでも，EMP1とEMP2の性質の差異を反映するものではないかと考える。

さて，上述のようにEMP1もEMP2もGWテストとの各測度との相関は決して高いとはいえなかったが，相関係数の数値に表れない変数間の関係を探るため，EMPとGWの相関図をつくってみることにする。図1はEMP1と，概念的にそれとの関係が深いと思われるGW2との相関図である。図から直感的に読み取れるように，EMP1の得点が低くてGW2の高い者はごく少数だがEMP2の得点が高い者のGW2の得点は高低に散らばっていて，L字型の曲線相関を示している。いいかえれば，質問紙の共感的関心の得点が高いからといって，その子どもが向社会的（よく下級生の世話をする）であるとは限らないが，共感的関心が低くて向社会的な子どもはあ



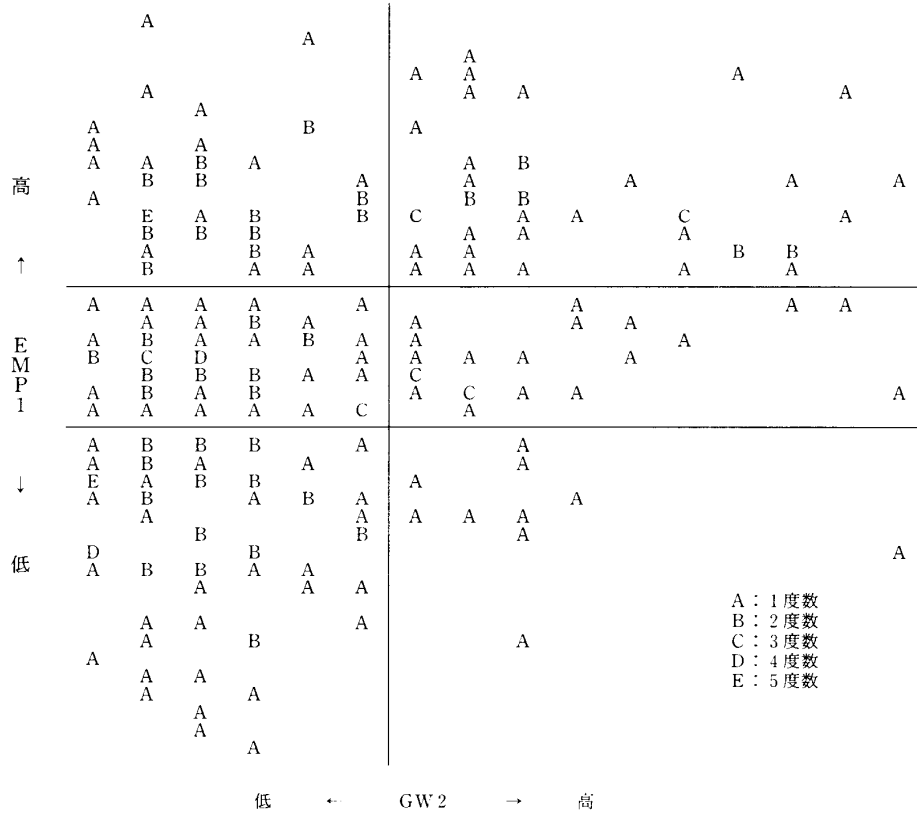


図1 EMP1とGW2の相関図

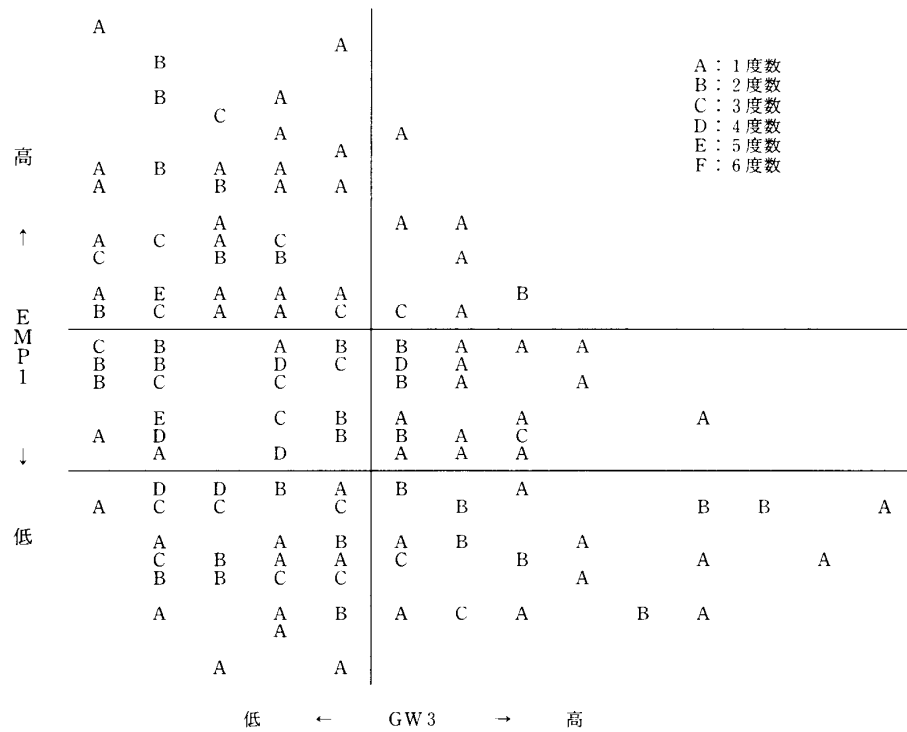


図2 EMP2とGW3の相関図

まりいない、つまり、EMPのある程度以上の高さが、友人評価にあらわれる向社会性の必要条件（十分条件では決してない）に近いことを示している。

図2にはEMP2とGW3の相関図を示した（ただしEMP2の高低が逆になっている）が、ここでも同様の傾向がみられた。これらのことを簡略化して示すと図3のようになる。この図はEMPの得点を6段階にわけ、各段階毎にGW高得点者（上位3分の1）の比率を求めたものである。ここでも図1、2と同様EMP1とGW2、EMP2とGW3の結果のみを示した。両関係ともEMPの得点が低い部分（段階の1、2）ではGW高得点者の比率がごく小さいが、EMP得点がある程度（段階の3）になるとGW高得点者の比率が急激に増加し、以後はそれほど変わらなくなることを示している。

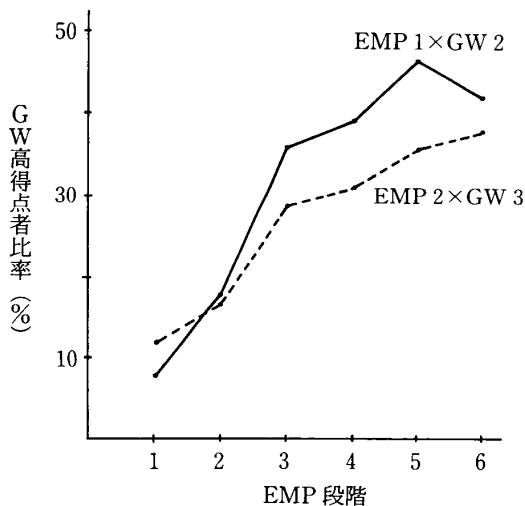


図3 EMPとGWの関係

#### 4. ソシオメトリック地位との関係

物語テストおよび質問紙による共感性のいずれの得点も、ソシオメトリック地位とはまったく相関がなかった。ソシオメトリック地位はGW得点とは異なって、個人の背景、能力、向社会性以外のさまざまな行動特性などが反映されるためと思われる。

## IV. 討 論

仲間による評価（Guess-Whoテスト）を向社会性および情動共有傾向の指標として、それらとの相関によって物語テストおよび質問紙による共感性測度の妥当性を評価しようとした。

結果は、全体として有意であり、また、物語テストおよび質問紙のそれぞれの下位尺度が、Guess-Whoテストの2種類の指標と論理的に妥当な相関のパターンを示し

た。しかし、相関の値は高いとは言えず、たとえば、質問紙による共感的関心の尺度得点が中間評価による向社会性を予測する力は小さいものであった。

これらの原因の一つは、物語テストおよび質問紙の方法上の弱点（たとえば物語テストの信頼性）にあることは既に述べた。また、共感性の両尺度がhappyな情動反応を含むのに対して、向社会的行動は、happyな場面では起こりにくいという場面のずれが原因の一つとなっているということも考えられないではない（ただし、共感性の両尺度ともhappyとunhappyな場面での反応傾向は同一因子に含まれるので、この問題はそれほど考慮する必要がないかもしれない）。

しかし、もともと、共感性と向社会性あるいは情動共有傾向とは同一の概念ではないから、いかに理想的な測定法が考案されたとしても、両者がきわめて高い相関を示すことは期待できないであろう。つまり、共感性と向社会性（情動共有傾向）は、結びつく可能性があると同時に、結びつきを弱める必然性も存在するわけである。

ここでは、向社会性（あるいは向社会的行動）との関係に絞って、共感性とのずれについて、考察して見よう。両者の結びつきを弱める必然性としては、二つの方向が考えられる。

第一に、向社会的行動は、共感性のような情動とは別のプロセスでも起こり得るのではないかという点である。多くの共感性研究者が指摘するように、共感性は向社会的行動の前ぶれになり得る。この前提は共感性研究の一つの動機づけになっているといってよいであろう。しかし、向社会的行動にとって共感性が必要条件かといえば必ずしもそうではない。たとえば、向社会的行動の一つである援助行動は、相手の立場に共感できれば促進されるであろうが、共感していなくても、道徳的判断や自己の過去の経験あるいは義務感などから援助の必要性を認識すれば、援助行動にでるかもしれないのである。

第二には、この逆に共感性が高くてもそれが目で見えるような向社会的行動に結びつかないというケースが考えられる。この原因もさまざまであろう。

1. 共感性は強くてもそれが「誤った共感」である場合、つまり、相手の情動的状态を誤って認識してしまう場合。

悲しんでもいない相手を（悲しんでいると思ってその存在しない悲しみに共感して）慰めたとすれば、その相手あるいは周囲からは向社会的行動とは受け取られないかもしれない。このような誤反応があるいは過剰反応（前者は論外としても後者のケースはよく起こり得るし、逆効果を生ずることもあると思われる）が共感性といえる

かどうかには議論の余地があるが、共感性とは全く別のものとして扱うことはできないし、少なくとも質問紙ではそのような認知的な正しさについては測定していない。

## 2. 共感性は強くても、それが行動に出せない場合。

たとえば、性格的に内気であるために、向社会的な行動をしたい気持ちがあっても、それを外に表すことができないことがある。ある人々にとっては向社会的行動も勇気があることなのである。また、たとえば対人的な効力感の低さが、向社会的行動をとることを抑制するかもしれない。行動に表さなければいくら共感的であっても意味がないかということになると、これも論議の余地があるが、いずれにしても、このような場合も共感性は向社会的行動を導かない。

## 3. 共感性は強くても、表現が適切でない場合。

1.の認知の不適切さと区別がしにくいですが、認知が正しくとも社会的スキルが未熟であるために適切な反応をとることができない場合が考えられる。

## 4. 状況的要因によって行動に表れない場合。

以上はいずれもなんらかの個人的要因によって共感が向社会的行動に結びつかないケースであったが、このほかに状況的要因が向社会的行動を妨げる場合も有り得る。たとえば、向社会的行動のコストが高すぎるような場合である。もっとも、共感性と向社会的性の相関の高さにこのような状況的要因がどれだけ影響しているかという当面の問題に関していえば、ある個人が特別コストの高い場面に遭遇しがちであるというような偏りが考えにくいとすれば、この状況的要因は考慮に入れる必要はなくなる。むしろコストの見積もり方やどの程度のコストなら向社会的行動を起こすかという閾値の高さに個人的な要因が反映している可能性がある。

共感性と向社会的性のずれについて、共感性を経由しない向社会的行動の可能性および適切な向社会的行動として表すことのできなかつた共感性という二つの方向性を考えてみた。われわれのデータ（図1および3）では、第一の方向より第二の方向をより強く示唆しているように思われるが、これだけで第一の方向の可能性を否定することはもちろんできない。

以上のように考えてくると、もともとずれのある両概念の測度間の相関をとって一方の妥当性の評価をすることは常にこのような限界がつきまとうと思われる。相関も中途半端な高さのものしか得られないであろうし、相関の高さの評価は、評定者の判断如何に左右されることになる。その意味では、このような相関モデルそのものの限界とってよいかもしれない。

本論文は、1990年度教育心理学科「教育心理学実験演習」における冬学期「特殊実験」で、「共感性の発達」のテーマに参加した尾辻、西澤両名が指導者である井上とともに行った研究をまとめたものである。

一連のテストおよび調査にご協力いただいた、青梅市立第一小学校と江戸川区立清新第一小学校の先生方および5年生(当時)のみなさんに心から御礼申し上げます。

## 文 献

- Bryant, B. K. (1982) An index of empathy for children and adolescents. *Child development*, 53, 413-425
- Davis, M. H. (1983a) Measuring individual differences in empathy: evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality & Social Psychology*, 44, 113-126
- Davis, M. H. (1983b) The effect of dispositional empathy on emotional reactions and helping: A multidimensional approach. *Journal of personality*, 51, 167-184
- Eisenberg, N. & Lennon, R. (1983) Sex difference in empathy and related capacities. *Psychological Bulletin*, 99, 100-131
- Eisenberg, N. & Miller, P.A. (1987a) The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychological Bulletin*, 101, 91-119.
- Eisenberg, N. & Miller, P.A. (1987b) Empathy, sympathy and altruism: empirical and conceptual links. In Eisenberg, N. & Strayer, G. (eds.), *Empathy and its development*. Cambridge University Press.
- Eisenberg, N. & Strayer, G. (1987) Critical issues in the study of empathy. In Eisenberg, N. & Strayer, G. (eds.) *Empathy and its development*. Cambridge University Press.
- Feshbach, N.D. & Row, K. (1968) Empathy in six and seven-year-olds. *Child development*, 34, 133-145
- Hoffman, M.L. (1982) Development of prosocial motivation: empathy and guilt. In Eisenberg, N. (ed.), *Development of prosocial behavior*. Academic Press.
- Lennon, R. & Eisenberg, N. (1987) Gender and age differences in empathy and sympathy. In Eisenberg, N. & Strayer, G. (ed.), *Empathy and its development*. Cambridge University Press.
- Mehrabian, A. & Epstein, N. (1972) A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 523-543.
- Strayer, J. (1987) Picture-story indices of empathy. In Eisenberg, N. & Strayer, J. (eds.), *Empathy and its development*. Cambridge University Press.

### 【物語テストの問題例】

I. 次には、このお話しの中のそれぞれの場面で、あったことが、5つずつあげてあります。これらの中で、あなたの頭に最もよく残っているのはどれですか。それぞれの場面から、2つずつ選んで、( )に○をつけてください。

#### (3)子犬との場面

( )「きゃあん。きゃあん。おくびょう者になるな!きゃあん。おくびょう者になるな!」

- ( ) なかには、あわてたはずみに、池の中に落ちた子もいます。
- ( ) 茶色の子犬もうれしそうに、白にまけまいと走ってきます。まだ、首にぶらさがった長いなわをひきずりながら。
- ( ) 「ぼくの名前はナポレオンというのです。ナポ公ともいわれますけれども。」
- ( ) 「白・・・ですか？白というのはふしぎですね。おじさんはどこも黒いじゃありませんか。」「それでも白というのだよ。」

II. 次には、このお話しにあった場面がいくつかあげてあります。それぞれの場面で、白はどういう気持ちになったのでしょうか？白の気持ちを考えて、たとえば、[うれしい]というように、[ ]の中にかんたんに書いてください。

(4) (子犬と話しているところ)

「おじさんはどこにすんでいるのですか?」

「おじさんかい？おじさんは……ずっと遠い町にいる。」

白は、ためいきをしました。

[ ]

III. 次のそれぞれの場面で、あなたはどんな気持ちがしたのでしょうか。あなたの気持ちに近いものを、それぞれの場面から1つずつ選んで ( ) に○をつけてください。

(1) (犬殺しにあったところ)

黒犬は何もしらずに、この犬殺しの投げてくれたパンか何かをたべているのです。

- ( ) この犬殺しは親切だ
- ( ) 黒はバカだなあ
- ( ) ワクワクする
- ( ) 黒がかわいい
- ( ) ハラハラする

【質問紙の項目】(項目の配列は実施したものと異なる)

1. 共感的関心 (EMP1)

- 1 友だちがニコニコ笑っていると、自分までがなんとなく楽しい気持ちになる。
- 2 何かを決めるときに、他の人の気持ちが気になることが多い。
- 3 友だちが落ち込んでいると、自分も落ち込んでしまう。
- 4 犬やネコが、ケガをしているのを見ると、かわいそ

うでたまらなくなる。。

- 5 ひとりぼっちりお年寄りを見ると、とてもかわいそうになる
- 6 友だちが元気がないと心配になる。
- 7 私は、会社につとめるよりも、社会福祉の仕事をするほうがよい。
- 8 友だちが泣いているのを見ると、自分までなんだか悲しくなるような気がする。
- 9 誰ともあそべないでひとりぼっちでいる子を見ると、かわいそうになる。
- 10 誰かがいじめられているのを見ると、はらが立つ。
- 11 とても楽しい気持ちになる歌がある。
- 12 友だちが何かなやんでいるときには、平気でいられない。
- 13 友だちがプレゼントをもらって喜んでいると、自分までうれしくなる。

2. 情動的関与 (EMP2)

- 14 映画やドラマを見ていて、思わず夢中になってしまうことがある。
- 15 友だちがいない子は、友だちが欲しくないからだと思う。
- 16 映画やドラマを見ていて、その話しに引き込まれるのは、ばかげていると思う。
- 17 友だちに悩みごとをうちあけられるのはいやだ。
- 18 物語を読んでいると、つい主人公の気持ちになってしまうことがある。
- 19 犬や猫も人間と同じように感情をもっている、と考えるのは、ばからしい。
- 20 うれし泣きする人を見ると、ばからしいと思う。
- 21 映画やドラマを見て、つい泣いてしまうことがある。

3. EMPT として追加する項目

- 22 電車やバスの中で子どもが大声で泣いていると、うるさいと思う。
- 23 ある歌を聞くと、とてもしんみりした気持ちになる。
- 24 人が泣いているのを見ると、いらいらする。
- 25 病院で人が注射されるのを見ると、自分までドキドキしてくる。